



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2016.12) 平成28年度:41-42.

看護学生における日常のストレスが実習中のコミュニケーションに及ぼす
影響

熊谷 亜美, 佐々木 愛里

看護学生における日常のストレスが 実習中のコミュニケーションに及ぼす影響

熊谷 亜美 佐々木 愛里 (指導：平 義樹)

緒言

近年のグローバル化、ITの発達等の社会情勢の変化に伴い、直接的接触によるコミュニケーションの減少、人付き合いの希薄化及び価値観の多様化がもたらした集団行動の減少が顕著となり、現代の10～20代の若者はコミュニケーションを苦手とする傾向がある。コミュニケーション能力は様々な職業で重要な能力・資質とされ、看護職においても同様である。しかし看護職を志す学生の中には上述の様にコミュニケーションを苦手とするものは多いと考えられる。河内ら¹⁾はENDOCORESを用いて看護学生を対象とした研究を行い、看護学生の場合は看護実践において対象者を理解する技術を習得しているため、応答的な行動とされる他者受容スキルが高得点を示したと結論づけている。すなわち看護学生は経験を重ねるにつれ対象者を尊重するコミュニケーションスキル(CS)が向上すると考える。一方で、現代の若者(学生)はコミュニケーションを苦手とする者が多い傾向にある。要因としては、現代の社会情勢によるものだけではなく、日常におけるストレス(アルバイト、部活動、人間関係)が関係しているのではないかと、我々は考える。そこで我々は日常のストレスが看護学生の実習中におけるコミュニケーションに何らかの影響を与えているのではないかと考え、これらを明らかにするために、鈴木ら²⁾が開発した新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)を用いて学生を高ストレス群(HS)と低ストレス群(LS)に分け、各群とCSとの関連性をENDOCORESを用いて解析した。

用語の定義

a：自己統制 b：表現力 c：読解力
d：自己主張 e：他者受容 f：関係調整

方法

【研究対象】

A 大学医学部看護学科学生第1～4学年 223名にアンケートを配布し回答が得られた学生は199名であった。その内19名は回答が不適切であり除外した。有効回答率は80.7%であった。

【調査方法】

SRS-18²⁾(Q1)により日常におけるHS、LSを抽出し、それぞれのCSをENDOCORES¹⁾(Q2)を基に分析した。アンケートの項目はQ1は18項目・4件法、Q2が24項目・7件法の計42項目とした。無記名自記式質問紙を配布し、回答調査票を回収箱に個人で投函していただき回収した。調査期間はH28.7.13～H28.8.26である。

【分析方法】

アンケートのQ1～Q2について単純集計を行った。各学年における実習中と日常のストレス

の差にはMann-WhitneyのU検定を行った。その他は多群間の比較となるため、Kruskal WallisのH検定を行った。各検定において有意水準は5%とし、統計ソフトはSPSS Var.22を使用した。

【倫理的配慮】

質問紙調査は、講義終了後の集団に対して研究目的と方法を述べる際①回答は自由意思によるもので強制するものではない②参加を拒否しても不利益を被ることはない③個人は特定されずプライバシーには十分配慮する④質問紙は厳重に管理し、その後はシュレッダーで裁断処理することを文書および口頭で説明し、回答用紙の投函をもって研究への参加同意と判断した。

結果

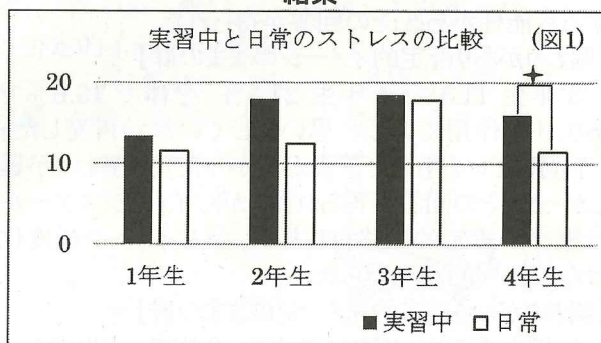


図1 心理的ストレス反応尺度(SRS-18)
各学年の日常と実習中のストレスの比較。+ P<0.05

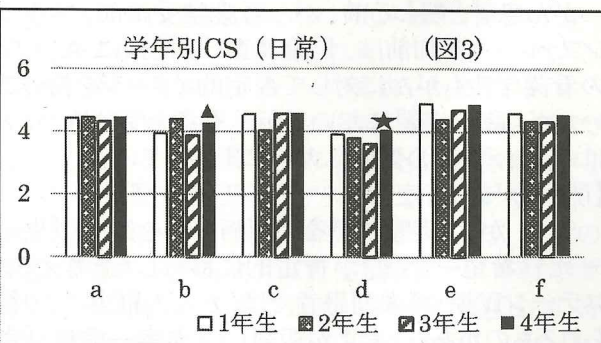
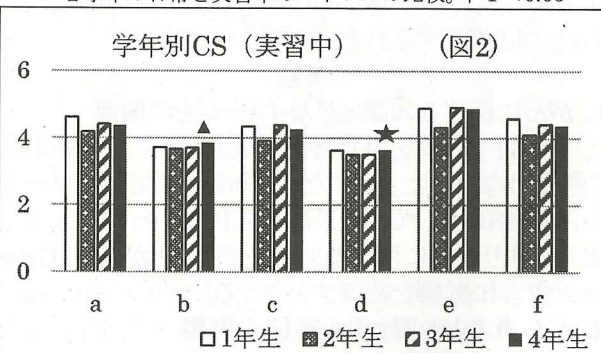


図2・3 ENDOCORES

学年別のCSを実習中と日常で比較。▲と★は有意差の見られた項目を示す($P<0.05$)

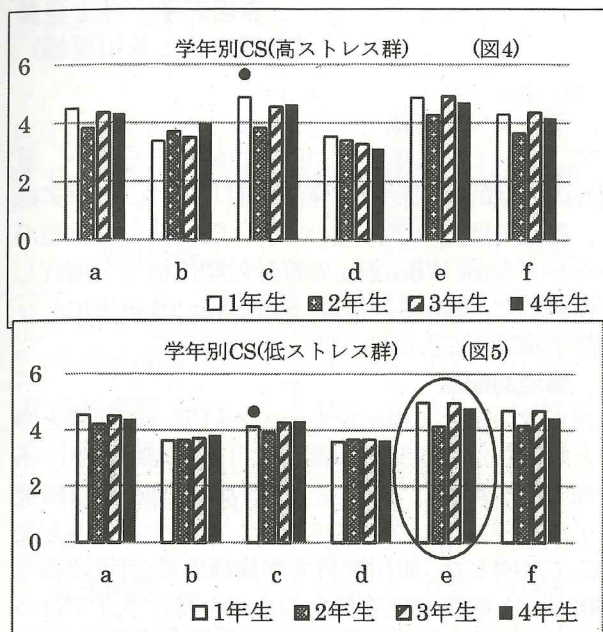


図4・5 SRS-18でHSとLSを抽出後、ENDCOREsにより比較

学年別のCSをHS、LSで比較。●は有意差の見られた項目を示す($P<0.05$)。また枠線で囲まれた部分は、2年生と他学年の比較により有意差が見られた項目である($P<0.05$)。

学年別に実習中と日常のストレスを比較したところ、全学年で日常よりも実習中のストレスが高いとの結果になった。(図1)そのうち4年生だけに有意に差がみられた($P=0.011$)。

ストレスの高低関係なく、実習中と日常のCSを比較したところ(図2、3)、b($P=0.007$)、c($P=0.029$)、d($P=0.015$)に有意に差がみられた。そのうち4年生のb($P=0.03$)、d($P=0.015$)が実習中よりも日常のほうが有意に高かった。

学年問わずHSとLSのCSを比較したときc($P=0.05$)にのみ有意に差がみられ、LSよりもHSのcが高値を示した。さらにcについて学年別で比較すると1年生にのみ有意差($P=0.019$)が見られた(図4、5)。HS、LSそれぞれで学年間の差を比較したところ、LSのe($P=0.037$)にのみ有意に差がみられた。図5より、eについて2学年間の比較を行ったところ、2年生と他学年のCSに有意に差がみられた。

考察

図1より全ての学年において、日常よりも実習中の方がストレスは高くなっていることがわかる。また、図2、3より実習中よりも日常のb、c、dが有意に高いことから、CSとストレスに関連性があると考えられる。そこでHSとLSを抽出し、それぞれのCSを比較したところ、cのみ有意な差がみられるが、a、b、d、e、fには差が見られない。この結果から、CSはストレスの高低が関係しているとはいえないと考える。したがって、CSには別の因子も関係している可能性が示唆される。

小林、兵藤³⁾らの研究によると、ストレスに影響を及ぼす要因となっている事柄は人によって

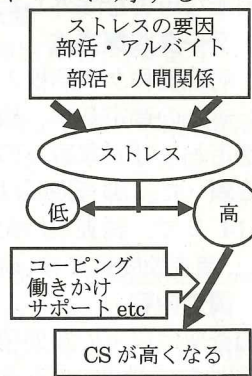
異なり、ストレスを原因としてとる行動も変わってくる。また椎野、江藤らの⁴⁾研究によると、ストレスの要因に関係なく、ストレスに対しての対処行動(コーピング)が深く関係しているとある。コーピング方法が回避-逃避型の場合には、ストレスは高いまとなり、CSの低下につながってしまい、特に表出性のCSの低い看護学生が回避-逃避型のコーピング行動を多く活用していると言っている。一方で、問題焦点型・情動焦点型の場合では問題の解決に向けて働きかけるため、ストレスが高くてCSへの影響はないということも分かっている。

以上のことから、ストレスが高いと、CSは低くなると仮説を立てていたが、ストレスの要因やコーピング方法などもCSに影響を与えるため、ストレスの高低が必ずしもコミュニケーションに影響しているのではないといえる。

図2~5において、有意差は得られなかったものの、2年生のCSが他学年よりも低い傾向にあるのは、実践的な講義や演習、課題の増加によってストレスが高いこと、またストレスに対するコーピングが確立されていない、教員からのソーシャルサポートが十分に得られないことなどが関係していると考えられる。

結論

ストレスの高低とCSの直接的関連は認められず、CSの向上はストレスの要因、ストレスに対する働きかけ方及びコーピング方法(ソーシャルサポートも含む)などに関わると考えられた。即ち看護学生においては学年が上がるにつれ、これらの要素が確立されることで高ストレス環境においてもCSの上昇が得られると思われる。したがってストレスフルな職場環境下に置かれる看護職は学生のうちからストレスに対するコーピング方法を習得し、またストレスの把握をしておくことが重要であると言える。今回の調査は1大学199名の看護学生を対象として得られた結果であり、本研究の結果だけでは一般化できないと考える。さらに全国規模での調査や比較を行い、仮説モデルの検証を行っていく必要がある。



引用文献

- 1) 藤本学、大坊郁夫(2007):コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み、パーソナリティ研究、第15巻、第3号、347-361
- 2) 鈴木伸一、島田洋徳、三浦正江(2014):新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討、行動医学研究、Vol.4, No.1
- 3) 小林民恵、兵藤好美(2007):看護学生のストレスに影響を及ぼす要因、岡山大学医学部保健学科紀要、17: 17~26
- 4) 椎野雅代、江藤和子(2011):看護師と看護学生のコミュニケーション能力とコーピングの関連、第21回日本精神科看護学術集会 専門Ⅱ 19群 72席、P354~358